

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Review)

博士の専攻分野の名称 (Degree)	博士 (マネジメント)	氏名 (Author)	藤澤 広美
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
論文題目 (Title) キャリア探索を促す大学キャリア教育に関する研究：自己制御の視点から進路選択自己効力感の機能に着目して			
論文審査担当者 (Dissertation Committee)			
主査 (Committee chair)	准教授	相馬 敏彦	
審査委員 (Committee member)	准教授	秋山 高志	
審査委員 (Committee member)	講師	金 宰煜	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of Dissertation Review)			
1. 概要 社会全体の持続的発展のため、大学を含む高等教育機関には学生のキャリア探索の促進が求められる。この要請を踏まえ、キャリア教育研究はキャリア探索の影響因にアプローチしてきた。そこでは主に学生の自己効力感を高めることの効果を前提としたキャリア教育が提唱されてきた。しかし、キャリア探索の自己制御的側面に着目すると、自己効力感の高さには逆にキャリア探索行動を抑制する可能性があり、本論文はこの可能性を追究したものである。			
2. 論文の構成 本論文は、序章と終章を含めて7つの章から構成される。 序章では、大学のキャリア教育をめぐる実状を述べ、キャリア探索を促進する意義について説明する。 第1章では、キャリア探索をめぐる従来の研究動向を概説し、重要な促進因の1つとして進路選択自己効力感の高さがあることを指摘する。その上で、近年の自己効力感研究が、自己制御プロセスの視点からその機能を捉え直す中、自己効力感の高さによる行動抑制の可能性を示している点について説明する。そして、進路選択自己効力感の高さもまたキャリア探索行動に抑制的に機能する可能性へと議論を展開する。 第2章では、先行研究の知見の問題を整理した上で、分析課題を提示する。 第3章では、第一の研究課題として、キャリア探索行動のタイプによって、進路選択自己効力感の効果が異なる可能性を検証する。さまざまな大学の学生を対象とする調査結果に基づき、より自己制御の必要の高いことが見込まれる環境探索行動では、進路選択自己効力感による促進効果が弱く、逆に自己制御の必要性が低いと予想される自己探索では、進路選択自己効力感による促進効果が強いことを示す。これらの結果は、キャリア探索を自己制御の側面から捉えることで、			

進路選択自己効力感による機能が制限される場合のあることを示唆するものであった。

第4章では、二つ目の研究課題として、キャリア教育の受講前後での進路選択自己効力感の変化がキャリア探索に与える影響を検証する。インターンシップへの参加意欲を指標とした上で、進路選択自己効力感や学習への動機づけの変化による経時的な影響を検証する。キャリア教育の受講生を対象とするパネル調査の結果、進路選択自己効力感が低下していた学生ほど、受講によって動機づけが高まっていたほど受講後のインターンシップ参加意欲が高まり、逆に動機づけが低まっていたほど職業レディネスが高まることを示した。

第5章では、実証研究の知見を総括し、キャリア教育がキャリア探索に影響するプロセスにおいて、進路選択自己効力感の低下がもつ効能について考察がなされた。

終章では、全体を総括し、本研究の学術的含意や実践的意義について考察した。また、今後検討されるべき課題を示した。

3. 論文に対する評価

本研究の学術的含意として次の二点をあげることができる。第一は、キャリア教育研究に対して、キャリア探索を自己制御の視点から捉えることの有用性、ひいては進路選択自己効力感の高さがもたらす逆機能を実証的に示した点にある。この点は、キャリア探索プロセスの特質を考慮せず、高い自己効力感の効果を前提としていた従来のキャリア教育研究に対して、視点の転換をもたらすものであるといえる。第二は、キャリア探索やその影響因を縦断的に捉え、変数の個人内変動に着目する意義を示した点にある。これまでの関連研究の大半が個人間変動に基づくことの限界を指摘したことで、個人内変動に着目する意義を実証的に示すことに成功している。

以上、審査の結果、本論文の著者、藤澤広美は博士（マネジメント）の学位を授与される十分な資格があると認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。